短　報

コロナ禍に思うこと

平　英美

コロナ禍と何であったのか、現代社会に何をもたらしたのかについては、終息した後に様々な視点からの考察がなされるであろう。

個人的には、医療社会学的に、というよりも政治社会学的に興味深い状況であると思う。「Who rules japan ？」は、日本の政治社会学、とくにミルズ由来のパワー・エリート論の根本問題であり、これまでのところ、官邸主導か官僚主導かをめぐって議論が闘わされてきた。日本の場合、戦後永らく、官僚が政策決定過程を主導し、国会議員や政権与党の中核も官僚出身者で占められていたのだが、80年代以降、自民党に世襲議員が増えるにつれ、国会対中央官庁のせめぎ合いが激しくなっていく。しかし、コロナ対策の決定に関しては、一転して構図が異なっていた。これまでも専門家を交えた各種審議会がアリバイ作りのため設置されてきたが、今回ばかりは、専門家会議の答申が即採用され実施されているように感じるからである。

あたかも「科学」が、国会や行政府さらに市民生活を支配しているかのようでもある。いつもは辛口のSNSを含めて、メディアも世論も「自粛」政策に唯々諾々と従っている。専門家会議が示す科学的データに誰も反論できないということもあるし、何よりコロナへの恐怖があるのだが、好意的な見方をするならば、専門家会議のバックボーンである日本の医療とその従事者に対して国民が基本的な信頼を寄せていることの表れだと思える。医療ミスが相次いで報道され「医療不信」が叫ばれた時期もあったが、各種調査によると、おまかせ医療の昔もICが浸透した現在であっても、国民の医療に対する信頼感に変化は見られない。今回、メディアが医療従事者をどのように取りあげるか、追いかけているが、医療関係者が感染者差別を受ける例がある一方、臨床現場における患者への献身や倫理性の高さを報じる内容が圧倒的に多い。

アンダーソンは、近代国家が演出するナショナリズムを「想像の共同体」と呼ぶ。コロナ禍が産み出した国民の連帯意識は、まさしくそれである。延期されたオリンピックが一番の狙いとした幻想が、むしろコロナ禍によって思いがけず出現している。オリンピックへのナショナリスティックな熱情はいつも単発的に終わるが、コロナがもたらしている一体感は結構持続的である。それだけに今の日本のナショナリズムのレベルをよく示していると考えられる。

日本は、フランス等のようにロックダウンすることなく、拘束力の弱い宣言のみで同じような効果あげている。フーコーは、健康や人口管理を通した統治と、それに対応して人びとが自律的に身体を規律することで権力作用を可能とするあり方に生権力という言葉を宛てている。一人一人が自己の身体や健康に関心よせることが、知らず知らず今日的な支配に絡め取られることに繋がっている。政府が刻々と感染者数、死亡者数を伝え、国民がそれに一喜一憂しながら行動を自己規制する様は、絵に描いたようにフーコー的である。おそらく、コロナ禍は、フーコーの研究者たちに、しばらくの間、格好の素材を提供し続けることになるだろう。

コロナ禍は、私たち現代人の社会、生活、精

神が医療に深く影響されている実態を垣間見させてくれている。コロナ騒動後、私たちの社会と医療の関係がどのように変容していくのか、まだまだ興味は尽きない。